
あなたなんか。

R-third

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたなんか。

【コード】

N0004M

【作者名】

R - t h i r d

【あらすじ】

…こんな感情、もう消してしまえたらいいのに。

…そうしたらきっと、もっと上手に彼に別れを告げる事が出来るのに。

…優しい彼をこれ以上、同情や責任感だけで、束縛したくはないのに。

突発的に書いた、小説ですらない短編。

内容的には、かなり暗いです。

「…なんでちゃんと、こんななる前に言ってくれへんかったん？」

「彼が、真っ青な顔で聞いた。私はクスリと笑い、答える。」

「…なに、それ？」

「もしかして、同情してくれてるの？」

「…馬鹿みたい。」

「…ほんまに、ごめん。」

「もう一回、やり直そう？」

「彼は、泣きそうな表情で言う。」

「私はその言葉が可笑しくて、ただ笑った。」

「お願いだから、帰ってよ。」

「…あなたなんか、もう好きじゃない。」

「切欠は、本当に些細な事だった。」

「彼が、会社の女の子の相談に付き合い、二人で食事に出掛けた事。だけど私は、それがどうしても嫌で、彼に詰め寄った。」

「いつもなら、彼が優しく私を抱きしめて、キスをして。心配するなって、言ってくれて。」

…それで、お終い。

なのにあの日、彼はそうしてくれなくて。

…私に、別れの言葉を告げた。

「結局お前は俺の事なんか、これぼっちも信用してへんのやろ？
もう、限界やわ。…百合、終わりにしよう。」

その言葉を聞いた瞬間、私の頭の中は真っ白になった。

だけど素直じゃない私は、彼に縋りつく事も、愛の言葉を告げる事
も。

…泣く事すらも出来ず、彼の後姿を見送った。

それから、約2週間が過ぎて。

…私は今、検査入院の為、点滴を打たれながら病院のベッドの上
にいる。

佐藤さんと別れてから、私は味覚というものを殆ど失ってしまった。
何を食べても、美味しいとは感じない。

そうなるかと食べるのも億劫で、私は次第に食事を口にしなくなって
いった。

そして、殆ど眠る事も出来なくなって。

…本当にどうしようもない程、ボロボロになってしまった。

情けない程、彼に依存していた自分。

改めてそれを、思い知らされた。

だからと言って、彼の事を引き留めたくて、私が連絡した訳ではない。

…共通の友人が、佐藤さんにこの事を密告したのだ。

そんなお節介、誰も望んでなどいなかったのに。

そんな事をしたら、優しい佐藤さんが私を放っておける筈もなく。

…愛もないのに、こうして私の側に居てくれるという訳だ。

ホントもう、うんざりだわ。

…こんなの、嬉しくもなんともありゃしない。

そしてその、翌日。

「百合。お前の好きなプリン、買ってきたで〜！」

彼が白いチープなコンビニのビニール袋を片手に、笑顔で言う。

私はクスリと笑い、答える。

「いらない。

…どうせ何を食べても、味なんかしないもの。」

それを聞いた佐藤さんは、また悲しそうに微笑む。

そんな彼の姿を見て、少しだけ胸が痛んだ。

「…そんな事言わんと、一口だけでも食べなあかんで。

…どうせ今日も、殆ど食うとらへんのやろ？」

彼が、心配そうに言った。

私はそれには答えずに、手元にあつた小説に視線を戻した。

なんでこの人は、こんなにも『いい人』なんだろう？

私の事なんか放っておいて、さつさと他の女の子を探せばいいのに。

内心かなりげんなりしながらも、無言で本を読み続ける。

彼はその間も、椅子に座って心配そうに私の事を見詰めている。

「もう、帰っていいよ？」

…別にあなたが、責任を感じる事じゃないから。」

そう。これは別に、彼の所為じゃない。

あんなにも優しく私の事を愛してくれた佐藤さんの事を、結局最後まで信用出来なかつた自分自身の責任だ。

彼は何も答えずに、ただ私の事を見詰め続ける。

私はそれに気付きながらも、ひたすら小説のページを捲っていく。

「百合はほんまに、本が好きやな。」

お勧めの本があつたら、教えてよ。」

彼が、笑顔で言った。

「…小説なんか、読まない癖に。無理しなくて、いいわよ。」

…はつきり言って、うつとおしい。」

私は心から、彼に言った。

でも最近、こんな私の可愛くない発言にも慣れてきたのか、佐藤さんはクスクスと笑い、言った。

「うつとおしいって…」。

ほんまにお前は、毒舌やな。まあ、ええわ。

最近ずつと見とったから、百合の好きな作家とか、なんとなく分かってきたし。」

私はまた無言のまま、ページを捲る。

彼は可笑しそうに笑い、そんな私の側に腰を下ろす。

あれから更に、一週間が経過した。

私はもう退院して、自宅でのんびりと毎日を過ごしている。

体調不良を理由に派遣先の会社もやめ、ただ黙々と本を読み続ける。仕事帰りに彼はふらりと家にやって来て、何をすることもなくただ私の側にいる。

こんな毎日がここ最近、ずっと続いている。

会話をすることもなく、お互いに触れるでもなく。

…ただ無言のまま、時間を共有する。

それが心地いいのか、悪いのか。

…それすらももう、私には分からない。

「百合。今日は俺も、本を買ってきたで。

お前が好きな、宮部 みゆきの本。」

翌日彼は、にこにここと笑いながら言った。

私はそんな彼を見て、またしてもげんなりしながら答えた。

「そう。…じゃあ、自分の家で、一人で読めばいいじゃない。

…わざわざ私の部屋に来て、読まないでよ。」

すると彼はまた笑って、それから言った。

「ええやん、別に。

百合の邪魔は、せえへんから。」

その言葉を聞き、私は溜息をひとつ吐き、それから活字だけの世界へと再び没頭していく。

彼もその隣に腰をおろし、真新しい小説を鞆から取り出した。

暫くすると彼は、そろそろ帰ると言って立ち上がった。

私は視線を上げる事無く、ただ頷いた。

それから彼はその本を、私の本棚へと収めた。

「…なんで、置いていく訳？」

私は、聞いた。

彼は、答える。

「だって、また明日も来るもん。

持って帰るの、面倒臭いやん？」

彼の方を見上げ、無言のまま睨みつけた。

すると佐藤さんは嬉しそうに笑い、言った。

「やっと俺の方、ちゃんと見てくれた！」

私はまた心底うんざりしながら、視線を小説へと戻そうとした。彼は微笑んで、私の頭を撫で、それから帰って行った。

… 心臓が、壊れるかと思った。

久しぶりに見る、彼の優しくて穏やかな笑顔。久しぶりに私に触れる、彼の暖かな掌の感触。それだけの事で、まだ心臓がドキドキしている。

こんな感情、もう消してしまえたらいいのに。
… そうしたらきっと、もっと上手に彼に別れを告げる事が出来るのに。

明日も来てくれるんだ、だなんて、心の奥底で喜んでいる卑怯な自分なんか、大嫌い。
… 優しい彼をこれ以上、同情や責任感だけで、束縛したくはないのに。

「… ねえ、佐藤さん。」

もう明日から、来てくれなくていいから。」

数日後、私は彼に言った。
佐藤さんはクスリと笑い、答える。

「嫌や。来んなって言われても、来るから。」

私は溜息を吐き、それから告げた。

「本当にもう、心配しないで。

私はもう、大丈夫だから。

…今日ね、前いた派遣先の会社の男の子に、告白されたの。」

彼は啞然とした表情で、小説から顔を上げた。

「その人ね、私の事、本当に好きなんだって。

…だからね、佐藤さん。もうホント、私の事は気にしないで。」

告白をされたというのは、本当。

だけど別に、その男性と付き合い合おうと思った訳じゃない。

…ただもう、優しい佐藤さんの事を、義務感や同情だけで縛りつけたくなかった。

「…そつが、分かった。」

小説に栞を挟むと、穏やかな笑みを浮かべ、彼は言った。

そんな彼の表情を見て、本当にやっと全てが終わるんだと思った。

「今まで本当に、ありがとう。」

…それと、ごめんね？」

精一杯の笑顔を浮かべ、佐藤さんに言った。

彼は私に、愛するという気持ち。

…遠い昔に無くしてしまった、人間らしい感情を、取り戻させてくれた。

本当に佐藤さんの事が、大好きだった。
…誇張などでは無く、彼は私の全てだった。

彼は無言のまま私を見詰め、それから抱き寄せた。

「…佐藤さんっ!？」

驚いて、思わず彼を見上げた。

佐藤さんは瞳を閉じたまま、静かな声で言った。

「ごめんな、百合。でもそんなん、嫌なんや。

好きやって言ってくれるヤツがええんやったら、俺がなんぼでも
言つたるから。」

…だからもう一回、俺を選んでくれへんか？」

訳が、分からなかった。

…彼はもう私の事など、愛してはいないのに。

今彼の中にあるのは、同情とか、義務感だけの筈なのに。

「なによ、それ？」

…他の男のものになると思ったら、急に惜しくなったの?。」

クスリと笑い、彼に聞く。

佐藤さんは私を強く抱きしめたまま、小さな声で、呟くように答えた。

「…そんなん、違うよ。」

百合が俺の事を信じてくれるまで、もう一回好きになってくれるまで、待とうと思った。

…でもお前が、そんなん言うから。」

ただぼんやりと、彼の顔を見詰めた。

彼は困った様に微笑み、続ける。

「別に俺、お前が言う程ええヤツとちゃうよ？」

ただ百合の事が、やっぱり好きやから。

…今言つても、百合、絶対信じてくれへんと思たから、言わへんかったけど。

百合は俺の事、やっぱり許せへん？」

お前の事、絶対裏切らへんって言つたのに、結局別れようって言つて。

…俺の事、信じろって言つたのに、勝手に逃げ出して。」

視界が徐々に、ぼやけていく。

「また、泣く…。」

ほんまにお前は、どんだけ泣き虫やねんっ！」

そして佐藤さんは、笑った。

呆れたように、でもとても優しい表情で。

「うるさいっ！」

佐藤さんが、そんな事言うからじゃんっ！！！」

私はまた、憎まれ口を叩く。

彼はそんな私を見て、可笑しそうにクスクスと笑った。

「百合を不安にさせる様な事、もうせえへんから。今度はもつとちゃんと、大切に作るから。だからもう一回、俺と付き合って下さい。」

彼は、真剣な表情で言った。

私はその言葉を聞き、小さく頷く。

「せつかくもう、手放してあげようと思ったのに。

…後で後悔しても、知らないから。」

佐藤さんは嬉しそうに、子供みたいな表情で笑った。私もそんな彼の笑顔を見て、泣きながら笑った。

そして彼の、腕の中。

私は薬に頼ることなく、久しぶりに深い眠りについた。

… F i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0004m/>

あなたなんか。

2010年10月10日05時19分発行